

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2017.9) 平成28年度:68.

心不全増悪で再入院した高齢患者の入院中と退院後の心不全増悪に関する認識の変化

佐久間 さゆり, 久米 茜

心不全増悪で再入院した高齢患者の 入院中と退院後の心不全増悪に関する認識の変化

キーワード：慢性心不全 増悪 認識 高齢者 自己管理

○佐久間さゆり 久米茜

旭川医科大学病院

I. 研究の目的

心不全増悪で再入院経験のある患者の初回入院から再入院を経て現在に至る心不全増悪の認識の変化を明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

- 1) 研究期間：2015年7月～2016年2月上旬
- 2) 対象：心筋梗塞後心不全となり入院、81日後退院、退院14日後心不全増悪となり再入院、23日後退院、退院後約9か月経過したC氏、70歳代後半、男性。
- 3) 研究デザイン：質的因子探索型デザイン
- 4) データ収集及び分析方法：症状や受診の契機、心不全増悪の認識、自己管理方法について入院中の診療・看護記録をカテゴリー毎に分類した。また、退院9か月後個室で20分間の半構成的面接を行い、逐語録を作成しカテゴリー毎に分類しデータとして分析した。

III. 研究の倫理的配慮

旭川医科大学倫理委員会の承認を得た。個人情報保護に努め、目的・方法・結果の公表等の他、協力は自由意思であり拒否・中断しても不利益が生じない事を説明し書面で同意を得た。

IV. 結果

食事、仕事、受診、症状の認識の変化をまとめた。

食事について初回入院時は「焼肉もラーメンも好き」と話し、再入院時は「絶対ラーメンと焼肉を食べてやると思った、今は反省している」と食欲を抑える事ができていなかった。面接時は「肉は1か月に1回、つけ麺に変えスープは飲まない」と話し好物を食す間隔を空ける工夫をし塩分、カロリー調整をしていた。

仕事や周囲のサポートについて入院前は仕事を多くしていたが、面接時は「ゆっくり階段を上がっている、職人達が荷物を持ってくれる、長距離運転時は妻がついてくる」と周囲の理解を得て仕事をしていた。また栄養相談は妻が同席し、減塩やカロリーを抑えた食事の工夫をしていた。

受診や症状について初回入院時は「体がこわくて息切れや靴下の跡がついていた」と話したが心不全の知識はなく、知人看護師に相談し救急外来を受診した。再入院時は体重増加や両下肢の浮腫を心不全症状と認

識し知人看護師に相談後に受診した。面接時に「あんなだるくて死にそんな思いはしたくない、だるくなったら受診しようと思う」と話していた。

V 考察

氏は「心不全患者がセルフケアを確立するためには獲得すべき学習課題が多いが、学習の機会があってもそれを受け入れる動機がなければ本当のセルフケア行動にはつながらない。」¹⁾と述べている。C氏は当初食への欲求が抑えられず、長年慣れ親しんだ食生活を変える事ができなかったが、2回の入院を経てこれまでの食事が不適切であったと実感し再入院を失敗体験と捉えた事が食生活の認識の変化に繋がったと考える。

仕事に関しては心臓リハビリの経験や心機能の程度を理解した事で仕事方法を改善する必要があると認識が変化したと考える。中井らは「家族の存在は食事や内服などの物理的な協力と、家族のために頑張るといった精神的な要因がある。」²⁾と述べている。自身だけでは仕事を優先する可能性があったが、周囲のサポートを認識した事で健康管理も頑張るとの考えに繋がったと考える。

受診に関しては知人看護師の助言を契機に受診しているが、2回の症状増悪の体験を経て、自覚症状を理解した事で症状出現時には早期受診した方が良いと認識が変化したと考える。

VI. 結論

1. 再入院を失敗体験と捉え、食事管理を徹底しなければならないという認識に変化した。
2. 心機能の程度を把握し、仕事の方法を改善しなければならないという認識に変化した。
3. 家族や周囲のサポートが得られる事を認識した。
4. 自覚症状の意味を理解し、早期受診した方が良いという認識に変化した。

VII. 引用文献

- 1) 氏家幸子：成人看護学 C. 慢性疾患患者の看護，第3版，廣川書店，161-174. 2001
- 2) 中井佳恵，上杉明子，梶井万記子他：急性心筋梗塞患者の生活習慣の改善に関する要因，成人看護 I，39，42-44，2008